様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２４０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６８０２

研究課題名（和文）英語多読のreplicationを通した効果検証研究

研究課題名（英文）Effects of extensive reading through replication

研究代表者
中西　貴行（Nakanishi, Takayuki）

獨協大学・経済学部・准教授

研究者番号：１０４０６０１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：多読研究の注目が集まる中、使用する学生にとって正しい選択となるよう、学生の読書習慣について正確な認識が必要となる。本研究では、様々な環境での読書習慣を調べるため、イタリアとアメリカで行われた多読研究のレプリケーションを行った。オリジナル研究と同様に、記述統計、回帰分析を行い、比較研究を行った。結論として、母語で読書習慣がある学生には、第2言語においてもその習慣が維持される結果となった。さらに、アメリカにおけるESLの環境では読書に関する積極的な姿勢の学生が、より多く読書をしている結果となった。

研究成果の概要（英文）：To select the right materials and volume of tasks and an appropriate teaching method, we need to know our students, particularly their habits and attitudes toward reading. To investigate Japanese university students' reading habits and attitudes, the present study replicated a study of Crawford Camiciottoli (2001) using the questionnaire of the original study. Ro and Chen (2014) also replicated this study by applying it to participants in an ESL context. In line with the original study, descriptive statistics and multiple regression analysis were applied to compare the result with the other two studies. The results indicated that a good "reader" of L1 can make a good learner of L2 reading, and lack of time was the most cited reason limiting extensive reading in all three studies. Similar results were obtained from the two EFL contexts, whereas participants with a positive attitude in an ESL context only tend to read more.

研究分野：英語教育

キーワード：多読　レプリケーション　英文読解

１．研究開始当初の背景

本研究は、前回の科学研究費若手研究（B）「英語多読における調整変数分析」の研究代表者として平成24年度から平成26年度の間に英語多読研究をメタ分析を通して分析した結果から発展した。その成果は“A meta-analysis of extensive reading research”として、TESOL Quarterly に掲載(2015年)した。その研究の結果、英語多読研究における様々な問題点を指摘し、具体的には、replication が少ないこと、研究で使用しているテストが多岐にわたり、比較検討する際の弊害となっていることなどの現状が浮かび上がった。また本研究代表者は、数年にわたり継続的に多読研究を続けており、Nakanishi & Ueda(2011)においても多読の実証研究を 4 つのグループを用いて行い、Reading in a foreign language に発表した。

英語教育では、最近注目を集めている多読に関しての研究が数多く発表されている(e.g., Elly & Mangubhai, 1981; Greenberg, Rodrigo, Berry, Brinck & Joseph, 2006; Hafiz & Tudor, 1990; Lai, 1993;Takase; 2003; Williams, 2007)。日本でも酒井(2002)の『快読100万語―ペーパーバックへの道』を発端とし、英語母語話者が英語を学ぶように、英語学習者が簡単な英語の本を数多く読むことによって、英語力の向上が図れるという多読が教育者、研究者の注目を集めている。

しかし、これまでの実践や研究から大きく分けて２点の問題が考えられる。第１に、日本国内外の言語学、英語教育研究において、多読に関しての個々の研究数は多いが、それぞれの研究は長期的なものが少ない。第２に、特に英語教育研究において、replication の研究がきわめて少なく、単独なものになりがちで、国内外での比較検討することがほぼないに等しい。これにより、個々の研究の質にもかなりの幅が見られ、体系的な比較ができない。Nakanishi (2015)では、こういった問題を指摘し、メタ分析による多読研究の効果検証を行い TESOL Quarterly にて詳述した。そして、今後の研究の道としては、以下の研究―Dinsmore (2006), Jeon & Kaya (2006), Masgoret & Gardner (2003), Norris & Ortega (2000)―のようにこれまでに蓄積されてきた研究を統合し、研究対象の効果を検証するのみにとらわれず、意義のある研究の replication を行い、それぞれの変量の効果検証を進めていくことである。この効果検証は、多読研究においてはいまだに行われていない。これが本研究の着想に至った背景である。よって、この研究では replication を通して、効果の検証を行った。

２．研究の目的

本研究の目的は、過去に行われた英語多読研究を「replication」を用いて日本における文脈の中で実験を行い、その結果を比較し、英語多読効果の検証を行うことである。英語力を伸ばすためには様々な指導方法があり、その一つが Extensive Reading といわれる多読である。現在では、多読に関する約200の先行研究が国内外で発表されている。今回その中でも着目したのが Camiciottoli (2001)である。この研究では、イタリアの大学生を対象とし、多読に関する行動と態度の検証を行った。その後、Ro and Chen (2014)の最新の研究でアメリカのＥＳＬの学生を対象として、同様の分析方法を用い、replication を行った。本研究では、さらに日本での replication を行い、全体的な効果を検証し、各国の相違比較を行うことを目的とした。

３．研究の方法

本研究の全体的な流れは、以下の３つの研究から成る。Camiciottoli (2001)(研究１)がイタリアの大学生を対象とし、多読に関する行動と態度の検証を行った。その後、Ro and Chen (2014)(研究２)が研究１の部分的 replication を行った。これに対して、本研究(研究３)を行うことで、より詳細な比較検証ができる。この他にも英語多読の replication 研究を探し、どのような状況になっているのかを調べる。具体的には以下の要領で行った。

a.「replication の実践」をするために必要な基礎研究調査

本研究では、replication を行うための準備をする必要がある。ここでは、基礎研究調査文献を集めた。まず、Education Research Complete, ERIC (the Educational Resources Information Center), Directory of open access journals, Dissertation Abstract, LLBA (Linguistics and Language Behavior

Abstracts)などといったデータベースを用いることで包括的に先行研究を収集していく。中にはファイルとして手に入らないものもあるが、その時は原稿を取り寄せる形をとる。さらに、データベースに載ってない国内の主要ジャーナル（JACET Journal, JALT Journal, Language Education and Technology）なども調査していく。次に国内外の学会（JACET、JALT、AsiaTEFL、日本言語テスト学会）などに参加して最新の情報を得る。とりわけ、AsiaTEFL はフィリピンで研究を行った Lituanas, Jacobs & Renandya. (2001)らのように海外で行っている、日本では見つけにくい多読研究を知る欠かせない機会である。このように調べることで、どのような replication 研究が行われているか、いないのかを知る。さらに 27 年度においては、Camiciottoli (2001)と Ro and Chen (2014)の研究の replication を行うことは決定しているため、各論文の質問紙の翻訳と精査を行った。加えて、G. Porte (Ed.)(2012). Replication research in Applied Linguistics.を基に、replication の基礎をまとめ、28 年度、29 年度に向けての基盤固めに取り掛かった。

b.「replication の実施」を行い、予備調査学会発表

27 年度に質問紙の精査を行い、その目途がついた時点で 28 年度に実証研究を実施する。分析方法は、研究１の分析方法と同様に因子分析、回帰分析を行う予定としていたため、被験者は 200 以上が必要となった。しかし、現実的には Camiciottoli (2001)では、182 人のイタリア人大学生、Ro and Chen (2014)では、ＥＳＬの 62 人の大学生を被験者としている。これは非常に少ない。このサンプルサイズの問題は、この研究に限らず英語教育では問題の一つである。この問題をクリアするため、なるべく多くの被験者を集める必要があった。サンプル数は実験を行う際には、特に長期的研究の際にはサンプル数の減少は否めないため、当初の数を多く獲得することに努める努力が必要となる。

この質問紙を実施し、ある程度の結果を集約できた時点で予備調査の学会発表を行い、その結果を第一段階として、Asia TEFL もしくは国内では全国語学教育学会(JALT)等の学会に発表する計画であった。そこで、他の研究者の反応を見たいと思っていたため、Asia TEFL で研究発表ができたことの意味は大きかった。この実証研究を実施すると同時に 27 年度から精査している研究論文の中からさらなる replication を実施することの可能性を探った。

c. 前年度の結果をもとに、実際の詳細な分析に入り、国別の比較検証。

前年度の結果をもとにさらなる検証を進め、最終分析を行った。Day and Bamford (1998)の ten principles を参照し、多読の構成にも注意を払っていく。この最終段階において気をつけなければならないことは、各研究のサンプル数が違うということである。質の良い研究でもサンプル数が少ないと、質に問題があるがサンプル数の多い研究に比べ、見劣ってしまったり、実際の多読効果がうまく現れない可能性もあるため十分な考慮と、注意が必要となった。

日本での検証結果が出た際に国別の比較をするが、その時に結果の解釈において困難が生じた場合は、実際に著者へ連絡を取ろうと考えていたが、今回は杞憂に終わった。これは、実証研究の報告の中でも詳細に記述されていない場合は、著者に連絡を取り、SD(標準偏差)などの数値を伺った経験があるため、必要となる場合は行う。

さらに、この研究を行う中で頭に入れておかなければならないのは、言語の違いによる母語転移や母語干渉である。実証研究の結果、そのようなケースが見られた場合は、van Ek & Trim (1991, 2001)などを参照し、解釈の助けとする。なお、最終的には、多読論文のデータベースの構築も一つ視野に入れているため、集めた論文をデータベース化し、多くの英語教育関係者にアクセスできる形で公開することを考えていたが、これは今後の課題となった。それにより、さらなる replication が他の研究者によって可能になると考える。

４．研究成果

多読研究の注目が集まる中、現在では様々な使用法が議論されており、中でも、使用する学生にとって正しい選択となるよう、学生の読書習慣について正確な認識が必要とな

る。本研究では、様々な環境での読書習慣を調べるため、イタリアとアメリカで行われた多読研究のレプリケーションを行った。オリジナルの研究と同様に、記述統計、回帰分析を行い、比較研究を行った。結論として、母語で読書習慣がある学生には、第 2 言語においてもその習慣が維持される結果となった。さらに、アメリカにおける ESL の環境では読書に関する積極的な姿勢の学生が、より多く読書をしている結果となった。英語教育の分野では、レプリケーションが少ないという現状についても触れ、今後、その数が増えることへの期待についても考察した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
Nakanishi, T. (2018). Extensive Reading Frequency and Attitudes in Italy, Japan, and the USA, Focusing on EFL and ESL Contexts: A Replication Study. *Dokkyo Journal of Language Learning and Teaching. 6*. 79-98

〔学会発表〕（計　2　件）
1. Nakanishi, T. Interests in Reading in Italy, the USA, and Japan: A Replication Study. JALT Pan-SIG International conference 2017. Akita International University. May 20th, 2017.
2. Nakanishi, T. Extensive Reading Frequency and Attitudes in Italy, Japan, and the USA, Focusing on EFL and ESL. TESOL Indonesia 2016 International Conference. University of Mataram. Aug, 11.

〔図書〕（計　　件）
なし
〔産業財産権〕
なし
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
中西貴行（NAKANISHI Takayuki）
獨協大学・経済学部・准教授
研究者番号：10406019

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし